彼らの奇妙な冒険—シンフルクルセイダーズ—

ウグイス将軍

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男鹿辰巳はある日、ひょんなことから赤ん坊を拾った。そしてそれにより、スタンド能力を手に入れ、巨悪を倒すための旅に出る羽目になってしまう。

ジョジョ三部を舞台にした二次創作ですが、原作のキャラは一切出てきません。各キャラにそれぞれ別の作品のキャラをあて物語をなぞる感じです。そのため、結構いろんな作品がでてきます。

目次

魔王を拾った男 ―― 1
戦慄の侵略者 ―― 15
背中刺す嫉妬 ―― 23

魔王を拾った男

むかしむかし、あるところに、それはそれはハンサムで、かっこよくて、モテモテで、みんなに尊敬されまくっていて、

「全員土下座」

絡んできた不良達を土下座させ高笑いする、心優しい若者がおりました。

「まてまてまて」

「む？」

親友の話に、古市は開幕早々にまったをかけたが、当の本人、男鹿はなぜ話を遮られたか分かっていない様子だった。

放課後、いきなり人に家に来てクーラーの聞いた部屋で人のケーキを勝手に食っているこの男がどういった人間なのか、長い付き合いである古市には言われるまでもないことだが、その傍若無人さにはいまだに慣れないものがある。

『む』じゃねーよ、だれが心優しくてモテモテだ。開口一番全員土下座ってお前、暴君じゃねーか」

「ばかめ、古市お前ばかめ、お前のかーちゃんでべそ！」

「でべそじゃねーよ」

男鹿はケーキを口の中につっこみながら「いいか、よく考えてみろ」と諭すようにつづけた。

「オレが理由もなく人を土下座させるような男だと思うか？」

「うん」

即答した瞬間、喧嘩で鍛え抜かれた男鹿の太い腕が古市の細い首をがっちりと絞めた。

「そうかそうか続きが聞きたいか!!」

「いでででギブギブッ!!」

不良達は昼寝をしていた心優しき若者を鉄骨でぶん殴ろうとしていたのです。

そんな不良を心優しき若者が川で洗濯（拷問）していると、川上のほうからどんぶらこ、どんぶらこと、おっさんの上にのった元気な赤

ん坊がながれて
「はいスト――――っプ!!!」
再びまったをかける古市。
だが今回は男鹿の常識外れなところではなく、わけのわからない飛躍をした話についてだ。
「えーと、何？　この話…どこへ持っていきたいの？　つーかどういうこと!?　おっさんにのった赤ん坊？」
「流れてきたんだから仕方あるまい」
「流れてこねーよそんなもん!!」
幼稚園児が考えたような支離滅裂な話だった。それを高校生の屈強な男が真剣に話すもんだから正気を疑ってしまう
「いや、確かにあれはオレも超ビビったよ。実際、他の奴らは一目散に逃げてったからな」
「そりゃ逃げるだろ普通…いやいやっていうかこれマジなの？　話聞かないといけないの？　オレこれからデートだから早く帰ってほしいんだけど」
珍しく相談があると言われらからおとなしく聞いていた古市だったが、真面目に聞いたのがバカらしくなるくらいバカみたいな話にもはや聞く気が失せていた。
「そー言わずに聞けって。ここからが大事なんだから」
だが、そのバカはバカ話をまだ続ける気でいるみたいだった。
「じゃーその赤ん坊連れてきてから言え！」
いい加減イライラしてきた古市は、少し声を荒げそう言いつけた。
「連れてきていいのか？」
すると、男鹿は神妙な顔でそう言った。
「ああ連れてきやがれ。連れてこれるもんならな！」
「アダッ」
「いやー、話が早くて助かるわ」
数秒後。古市の部屋に赤ん坊がいた。
男鹿のであろう制服を羽織っただけの、素っ裸。髪はエメラルドグリーンで目つきが悪く、ご丁寧に口におしゃぶりまで咥えた、正真正

銘の赤ん坊がやってきた。やってきた、というか、部屋の前にいた。
「な、本当に赤ん坊だろ？」
「ダー！」
絶句する古市をよそに、なんとものんきに話す男鹿。
「…お」ギギギとさびたロボットのように口を開く古市。
「お？」これまたのんきに返す馬鹿に、古市は思わず声を大にして叫んだ。
「おのれはずっとこれを部屋の外に待機させとったんか――――ッ!!!」
「いきなり見せたらびっくりするだろうが――――ッ!!!」
「ダーブー!!」
休息が必要だった。体ではなく、心の。というか精神の。
「…なんで連れてきてんの…しかも人ん家に…」
まったくもって落ち着きを取り戻していない古市の至極まっとうな問いかけに男鹿は「それがよ」と続けた。
「とりあえず赤ん坊とおっさんを拾いあげたんだが、どうしようか悩んでっとこいつがなんか見てくるから、仕方ないと大人の対応をしたら、なんか懐いた」
「いや、全然わからん」
そのおっさんはどうしたんだとかいろいろ言いたいことはあったが、赤ん坊の様子をみるに懐いているのは本当のようだ。『暴れオーガ』と呼ばれた（古市命名）この残虐非道の塊にここまで懐くとは、いったいなにをしたのか。
「・・・なついた？」
唐突な言葉だった。
男鹿と古市、赤ん坊の三人しかいないはずの部屋に唐突に響いたその凛とした声は、窓際に立っていた。窓際、というか窓の前にある机の上に、土足で立っていた。
「貴様ごときに、坊ちゃまがなつくわけなかろう」
綺麗な少女だった。ゴテゴテの真っ黒なゴスロリ服が、全く違和感を覚えさせないほどに。手にはこれまたゴスロリチックな日傘を

持っており、煌びやかな金色の髪は後ろに束ねられ、鋭い目の奥ではエメラルドのような瞳が輝いていた。
「死ねドブ男」
そしてものすっごい冷たい目をしていた。
養豚場の豚でも見るかのような、残酷な目だった。
「うおおおいッ!!?」
いきなり現れた存在感のありすぎる不審人物にようやく反応が追い付いた古市は思いっきり腰を抜かしていた。
(なに!?　どなた!?)
いつもなら美人は大歓迎の古市だがさすがに動揺とか困惑とかのほうが強すぎた。
「ああ!?　誰だこら。誰がドブ男だ」
こんな状況でいつも通りの男がいた。
「いきなりどっからわいてきたんだボケ。つーかそこおりろ。人んちで偉そうにしやがって」
初対面でいきなり「ドブ男」呼ばわりされた怒りが動揺とかよりも勝っている男がいた。
自分の家かのような言い方だが、こんな唐突な状況でも「あとくつぬげ」とまで言える胆力はさすがなのかもしれない。単なるバカということもあるのだろうが。
しかし、そんな男鹿を少女は鼻で笑った。それにさらに苛立つ男鹿。
軽やかに机から降りると(土足のまま)、男鹿に、いや、男鹿に抱えられた赤ん坊に近づいた。
「さあ坊ちゃま、参りましょう。ヒルダが迎えにあがりましたよ」
さっきまでの冷たい目がウソのように、愛しい子をみるような、優しい目で少女はそう言った。
広げた両手を赤ん坊に近づけ、赤ん坊を受け取ろうとする。
が、
「ダ」
そっぽ向く赤ん坊。

ひしっ、と男鹿にすりより拒否する赤ん坊。
少女はしばらく茫然としていた。
「プ」
思わず漏れ出たその声は、赤ん坊の上からだ。
「いやがってますなー」
ものすっごい嫌な笑顔だった。性根が腐ってないとできない顔だった。自分をバカにした少女が滑稽な状況になっていたからだろうが、それでもここまで嫌な顔はできないだろう。
「えーっと、坊ちゃま？　ほら、いきますよ！」
少女も少女でかなり動揺していた。バカの煽りも耳に入っていない様子だった。
赤ん坊の足をつかみ男鹿から引き離そうとするも、赤ん坊はしっかりと男鹿の服をつかんでいる。
「ちょ、お離し下さいそんなもの…！」
「はっはー、まいったなーこりゃ」
結構な力で引っ張っている様子だったが、それでも赤ん坊は男鹿から離れようとしない。そして男鹿はすっごい上機嫌だった。「そんなもの」よばわりされているのがきにならないほど。
「おい男鹿。その人は迎えに来てくれた人なんじゃ」
バカみたいに高笑いしている男鹿に、古市がそういったとき。
「いい加減にしないと…！」
と、少女がそう言った瞬間だった。
「ダ――――――！」
赤ん坊が、雄叫びをあげた。いや、赤ん坊がしたのは雄叫びだけではない。
黄色い発光があった。小さな部屋の光が、塗り替えられるほどの強い発光と、バチバチバチという轟音が赤ん坊を中心に起こった。
「ぎゃあああああああ!!?」
赤ん坊をつかんでいた少女はもろにその衝撃を喰らっていた。男鹿と古市には被害が及ばなかったが、目の前で起こったことに仰天していた。

電撃が発したのだ。その赤ん坊を中心にして。

「失礼しました」

数分後。

焦げ跡がついたまま正座で座る少女がそこにいた。靴を脱いで。凛とした登場シーンが台無しであった。

「私、その赤子に仕える侍女、ヒルデガルダと申します」

冷静さを取り戻した少女は改めてそう名乗った。第一印象が最悪すぎるため不自然極まりないが、しっかりすれば礼儀正しくできる少女なのかもしれない。まあ初対面の相手にあの容赦ないいいようからしっかりする気がないのは見てとれるのだが。

「そしてその子は我々の王となられるお方。名を、カイゼル・デ・エンペラーナ・ベルゼバブ四世。つまりは我々の国の王子でございます」

そしていきなりとんでも設定をぶち込んできた。

「…王子？」

「はい」

「…マジ王子？」

「マジです」

男鹿と古市は赤ん坊を見た。目つきが悪く、ふてぶてしい顔をしていた。しかも素っ裸。とても一国の王子には見えない。

互いに顔を見合わせる二人。さすがの男鹿も動揺している様子だった。

「え、えーと、ヒルダさん…でしたっけ」

困惑のなか、古市は言葉を振り絞って発した。

「いいんですよそーいう設定説明とかはホント。オレ達この子を連れて帰ってさえくれたらそれでもう、はい」

「正直もうスルーです」とばかりにそういう古市。男鹿もよくいったとばかりに頷いた。

しかし、ヒルダは神妙な面持ちでうつむいていた。

「…いえ、それは無理でございます」

不穏な言葉に、男鹿の顔が少し曇った。

嫌な予感がしたのだ。なにか、とんでもないことに巻き込まれる、そんな予感が。

そしてその予感は、すぐさま回収されることとなった。

「何故ならばあなたは、選ばれてしまったのですから…」

間抜け面の男鹿を指さし、ヒルダは、言った。

「魔王の親に」

アメストリス。

中央ヨーロッパにあるその国は円形の国土が特徴で、雪山、砂漠、炭鉱など多様な地形があり観光地としても名高い。

そんな国の頂点に立つ国王こそ、ベルゼバブ三世その人であった。ベルゼバブ三世は適当で調子者なところはあるものの、その有能ぶりから国民からは賢王として慕われていた。

しかし、数か月前、そんな豊かな国を巨悪が襲った。

オール・フォー・ワン。

歴史の影に隠された、凶悪の存在。百年前、彼が持つ不思議な力で世界を恐怖に陥れようとした、悪のカリスマ。

その野望は、ベルゼバブ三世の祖先によって打ち砕かれ、闇に葬り去られた。はずだった。

しかし、オール・フォー・ワンはその不思議な力を持って生き延びていたのだ。そして長い時を経て復活した巨悪は、自らの脅威となるベルゼバブの一族を滅ぼそうとした。

オール・フォー・ワンの復活を察知したベルゼバブ三世は、幼い我が子をその魔の手から守るため、そして、その子に宿されたオール・フォー・ワンをも打ち砕く力を託すため、赤子の世話を任せていた侍女ヒルダと、信頼する部下と共に逃がしたのだった。

赤子。ベルゼバブ四世に宿る力。それは、巨悪を倒すのにたる力。信頼できるパートナーと共にいることで、初めて起こる力。

ヒルダ達は、ベルゼバブ三世の意思のため、赤子の力を引き出すパートナーを探す旅にでた。

赤子と共に歩み、オール・フォー・ワンを倒すための力、親となる者を探す旅に。

「…と、いうわけでございまして…」
童話の世界だった。
とても現実の話とは思えなかった。
だが、つい数分前に現実とは思えぬ現象を電撃という形で見てしまった男鹿達にはその童話を現実として飲み込むしかなかった。
というか、現実だとしたらかなり重たい話なのだが、それに反し少女は淡々と話しているのはなんなんだろうか。
そんな話を聞かされ、何も言えずにいる男鹿の肩を叩く手があった。
振り向くと、古市が健やかな笑顔を向けていた
「ガンバ」
「ちょ、お前この状況で逃げんのかよ!?」
「うん、ていうか帰れ。オレ関係ねーみたいだし」
「おおいっ!?」
味方だと（勝手に）思っていた者に捨てられ、一人孤独になる男鹿。
「くっ、冗談じゃねーぞ、なにが魔王の親だ!!　ちょっとガキになつかれたくらいでふざけんなよ!!　知るかそんなもん、オレ達はぜってーやらねえからな!!」
「達っていうな」とよこでほざく古市をよそに、出されたコーヒーを飲んでいるヒルダに男鹿はそう言い放った。
「…つまり断ると？」
「たりめーだ!!　とっとと持って帰れや!!!」
そう言いながら赤ん坊を机に叩き置く男鹿。
ヒルダはその言い分に声を荒げるでもなく、むしろ優しさすら感じる声を出した。
「そうですか、それはよかった・・・」
コトリと、静かにコーヒーカップを机におき、そして、美しい笑顔で言った。
「では死んで下さい」
そういいながら、持っていたゴスロリチックな日傘から、すらりと銀色の刀身を抜いた。

数秒後、古市の部屋が半壊した。
「みゃあああああああッ!!!」
すでに外に逃げていた二人だったが、自分の部屋が薙ぎ払われる様子を見てしまった古市は悲鳴を上げていた。
「おおい!!! 待てこら男鹿ぁ!! てめえあれ絶対弁償させるからな!!
絶対だかんなぁ!!」
「落ち着け古市、オレは大丈夫だ!!」
そういう男鹿の腕には、なぜか例の赤ん坊が抱えられていた。
「てめーが一番落ち着け!! なに持ってきてんだそれえ!!!」
男鹿はどうやら無意識だったようで、「ん、なにって、ぬがっ!?」といまさら気が付いたようだ。
「ぬが、じゃねーよさっさとおいてけよ!!」
「いや、ていうかなんか離れねえ・・・!!」
男鹿は赤ん坊を引き離そうとするが、シャツをしっかりつかんで離れようとしない。赤ん坊が男鹿の背中をつかみ、さらにそれを引きはがそうとしているため赤ん坊のワンパク君が後ろを走っている古市にモロに見えていた。ものすごい絵面だった。
「あきらめろ」
そんなことしているうちに、上から声が聞こえた。凛とした、あの声だ。見上げると、刀身をむき出しにした仕込み剣を構え、ヒルダが電柱の上から見下ろしていた。
「アメストリス軍で鍛えられたこの私から、逃げられるとでも思っているのか?」
「うるせー一生そこでかっこつけてろ!!」
「パンツ見えてますよー!!」
そんなヒルダに対しバカ返すバカ二人。
男鹿達は無我夢中で走った。
住宅街を右往左往し、鉄塔の近くの空き地にたどり着いた。
息を切らし、少し立ち止まった瞬間。男鹿の頬に冷たい感触がした。
「それで逃げたつもりか?」

その冷たい目には、冗談のような気がまるでない。
本気で、男鹿を殺そうとしている目だ。
「てめえ、最初っからこーするつもりだったのかよ」
「・・・坊ちゃまにふさわしい相手でなくてはならないのだ。貴様が断ると言ってくれてよかった」
切っ先は男鹿の頬に押し付けられ、血が滴っていた。
その血が、赤ん坊の頬にポタリと落ちた。
赤ん坊は、生まれてまだ幾ばくも無い。だが、血の色を知っていた。
それが、どういうものかを知っていた。
「ヴ～～～」
「坊ちゃま・・・？」
なにやら遠くで不良が騒いでいる声が聞こえたが、男鹿の耳には入らなかった。
バチ、と何かが弾ける、いや、迸る音がした。
赤ん坊の目に、涙が溜まっているのが見えた。爆発寸前の、漏れ出た涙が。
そして、
「ビエエエエエエエエエンッ!!!」
轟音が落ちた。
空き地の中心を、電撃が蹂躙していた。古市の部屋で起こったものの、比にならないほどに。
「うおおおっ!!?」
間一髪逃れられた古市は、その壮絶な光景に絶句してしまった。
迸る電撃の渦の中からは、赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。
「か、かんしゃく？」
同じく逃げたらしいヒルダも、その光景を見て動揺しているようだった。
「ぼ、ぼっちゃま、ダダをこねないでくださいまし！」
「だ、ダダ!?」
だだとかそんな言葉では説明不足がすぎる威力だ。
実際、ヒルダがなだめようとしたが全く収まる様子を見せず、近づ

こうとするも電撃によって阻まれてしまっていた。
「はっ、そういや男鹿は・・・」
ようやく男鹿が見当たらないことに気が付いた古市は、まさかと思い電撃の渦の中に、目を凝らした。
光輝く渦の中はほとんど見えないが、うっすらとなにかがあるのが見て取れた。
男鹿っぽい男が、ふらりと、倒れる姿を。
(気絶してるー!! ていうか最悪死んでる!?)
男鹿の容態を気にする間もなく、古市は辺りがざわめきだしたことに気が付いた。
そりゃあ、こんな空き地で放電が起こっていれば騒ぎになるのは当たり前だ。
ただの一般人である古市にこんな状況をどうにかできるわけもない。なんとかできるとしたら、事情を知っているであろうヒルダだけだろう。
「ちょ、あんた。なんとかならないんですかこれ!! このままじゃまじでやばいんじゃ」
「ムリです」
しかし、その思いもむなしく、ヒルダは青ざめながら即答した。
「ああなってしまっては。こんな・・・こんな大泣き、止められるのは国王様しか・・・」
「そ、そんな」
それはつまり、どうしようもないということだ。いまだ聞こえるあの泣き声が止まるのを待つしか。それを願うしか。
青ざめる古市だったが、その時は唐突に来た。
突然だった。
すべでが、突然消えたのだ。
逆る稲妻、轟く騒音、そして泣き声が、全て、消え去っていた。
あとに残った野原には、泣き止んだ赤ん坊、そして、気絶したはずの男鹿がいた。
「男が・・・ギャアギャア泣くんじゃねえ」

隣の赤ん坊の小さな頭を、男鹿は座って優しくなでていた。
「なめられちまうぞ」
赤ん坊の瞳には、まだ涙が残っていた。だが、それ以上流しはしないだろうと、赤ん坊の顔から見て取れた。
「ダ」
声はかすれていたが、確かに、力強くそう返した。
それを聞くと、男鹿は立ち去りながら手を振った。
「よーし、じゃあもう泣くなよ」
その顔は「決まった」とばかりにどや顔だったが。
ヒルダも、その様子に絶句していた。
自分でも止められなかった癇癪を、いとも簡単に止めたその男を、信じられない目で見ていた。
しかし、
ピシッ、と、なにかが砕ける音がした。
遠くから見ていた野次馬が、なにか騒いでいるのが聞こえた。
ギギギと、何かが軋む音がした。
鉄塔だ。
電撃の渦によって土台が壊された鉄塔が、倒れようとしていた。
その先には、男鹿のもとへ寄ろうとしている、赤ん坊が。
「坊ちゃまーーーーっ!!!!」
ヒルダが叫んだ瞬間、男鹿は走っていた。
男鹿も、自分自身が何をしていたのかわからなかった。
反射的に赤子を抱えていた。
逃げる時間はもうない。
鉄塔はすぐそばまできており、激突の瞬間は近かった。
「う」
逃げようとはしなかった。
男鹿は赤ん坊を守るように抱え、鉄塔に向かって叫んだ。
「うおおおおおおおおおおお!!!!」
瞬間、鉄塔が消し飛んだ。
十数メートルはあったであろう鉄塔が、跡形もなくなっていた。

その光景に、誰もが茫然としていたが、男鹿は別のものを見ていた。
なにかが、いた。
男鹿の、すぐよこに、寄り添うように立っていた。
奇妙な人物だった。いや、人の形をしていたため人物といったが、男鹿にはそれが人とは思えなかった。まず全身が緑色だった。肌も髪も、薄いエメラルドグリーンに覆われていた。緑色の学ランのようなものを着ていたが、その背中には蟲のような羽が生えていた。そして、なぜか口に黄色のおしゃぶりを咥えていた。
「なん・・・だ、これ」
「あれは・・・」
ヒルダも、その存在に気が付いたようで、なにかを言おうとしたが、それよりもはやく別の声が聞こえた。
「『スタンド』さ」
声の方には、男が一人いた。
青い、軍服のようなものを着た男だった。目の色と髪色は黒だったが、顔立ちからして日本人ではないのはわかった。優しい、おとなしそうだが、その奥に確固たる芯がある、そんな顔だ。
そして、なぜか全身ずぶぬれだった。上から下までびっしょりで、ぽたぽたと水滴を垂らしながら立っていた。
だが、男鹿はその理由を知っていた。
「てめえ、あのとき川で流れていた・・・」
そう、この赤ん坊を背中に乗せて漂流していた、河原にほったらかしにしていた、あの男だった。
「そう、アメストリア軍大佐、ロイ・マスタングだ」
「いやそれは知らねえけど」
どや顔でロイと名乗るその男は、興味深そうな目で男鹿を、その横に立つなにか、「スタンド」を見ていた。
「スタン、ど？」
「そうだ。言われただろう？　選ばれたと」
そう、選ばれた。
魔王の親。巨悪を打ち砕くと言われる、魔王の力を持つ資格がある

と。
「幽波紋(スタンド)。それは生命エネルギーが作り出すパワーのあるビジョンだ」
ロイはそう言いながら、パチン、と指を鳴らした。
すると、男鹿のそばで焔が弾けた。爆発のようなものではなく、本当に、焔が弾けるように発生して、消えた。そしていつの間にか、ロイの両手に白い手袋があった。甲には、紅い魔方陣のような模様がついている。
「これが私のスタンド、『焔の錬金術師(サタン)』。憤怒の名を持つ焔のスタンドだ」
「そして」と白い手袋をつけたまま、ロイは男鹿のスタンドを指さした。
「そいつの名は、蠅の王『ベルゼブブ』!! オール・フォー・ワンを倒すための、お前の力だ!!」

戦慄の侵略者

県立石矢魔高校。
ヤンキー率一二〇パーセントと呼ばれる県下最凶の不良校だ。三歩歩けば不良に絡まれるこの学校で、異彩を放つ男がいた。
男鹿辰巳。
デーモン、アバレオーガなどの異名を持つその男は、機嫌でも悪いのかただでさえ目つきの悪い顔にさらに鋭さを増していた。
だがその日は、そんなものよりもさらに存在感があるものがいた。
それは男鹿が手にもった筒状の物体であり、そしてアバレオーガと恐れられた男の背中にしがみつきながら器用に眠っている者だ。
「よーやく眠りやがった」
目元に隈が出来ている男鹿は、あくびをしながら手の玩具、ガラガラを鳴らしそう言った。
「・・・お前、なんで連れてきてんの、王子」
校舎の外で弁当を食べていた古市が男鹿の背中にしがみついている赤ん坊を見てひきつった顔をしていた。
「古市、聞いてくれ」
珍しく、男鹿は憔悴している様子だった。
顔を青ざめながら、ため息をつくように男鹿は口を開いた。
「オレんちは、もうだめだ」
「ふざけんな！　オレんちのがもっとだめだ！　一昨日から半壊してんだぞ!!」
「きけこら」とわめく古市を気にせず、男鹿は問答無用で回想を始めた。
「というわけでございまして」
夕方の六時ごろ。夏のため、まだ日も暮れきっていない時間帯。
夕飯のため、男鹿家の全員が居間で寛いでいた。
「今日からこの子共々お世話になります。ヒルデガルダと申します。ふつつかものですが、よろしくお願いします」
そんなお茶の間に爆弾をぶちこむゴスロリ少女。

全員もれなく固まっていた。
「まてまておい。なんだその誤解をまねく言い方は」
「ん？　なにか問題でも？」
「大アリだ!!」
「しかしこの国ではこうするものだと聞きました」
「誰情報だこら!!　前提が間違ってんだよ!!」
男鹿は冷や汗が止まらなかった。男鹿の父に母、姉の全員がヒルダと、そしてその横にいる赤ん坊、ベル坊を凝視していた。
「だいたい言ってんだろ。オレは親だなんで認めねーっつの!!」
親。という単語に男鹿家は強烈な動揺を食らったが、男鹿はそれに気づいていない。
そんななか、なんとも愉快な笑い声が部屋の入口から聞こえてきた。
「おいおい、何をいまさらそんなことといってるんだ」
扉の前に立っていたのは、青い軍服のような服装の男だった。整った顔立ちは東洋人のそれではなく、どこか凛々しさを感じさせる。
「あ、あなたは？」
「ロイ・マスタング。そこのヒルダの連れ、まあ兄みたいなものです」
ロイはそうにこやかに笑いながらヒルダの肩に手を置こうとして力強くはじかれていた。
「それよりも男鹿辰巳よ。あれだけのことをしておいてこの子の親だと認めないなんて、男としての甲斐性がないんじゃないか？」
「だから誤解を招く言い方すんじゃねーよ!!」
そんなやり取りを聞き、我慢の限界が来たのか男鹿家の大黒柱、男鹿洋次郎が机を叩いた。
「辰巳!!　お、お前子供まで作っておいて、しかもそれを認めないだと!!」
「ちょ、ちょっとまて。だから誤解だって」
「なにが誤解だ！　どう見てもお前の子じゃないか！　目元なんてそっくりだぞ！」
「そっくりじゃねーよよく見ろ！」

父子でどなり合っているなか子供のほうを見ると、「あらほんとそっくり」「小さい頃の辰巳を思いだすわぁ」「あんたどこの国のひと？」「アメストリアです」「どこだっけそれ。日本語達者ねー」と、女連中がめちゃくちゃなじんでいた。先ほどまで父と一緒に固まっていたはずなのにもうすでに受け入れている男鹿家の女に父子共に絶句してしまう。

「ひ、ヒルデガルダさん、それにロイ・マスタングさん!!」

洋次郎は男鹿の頭をつかむとヒルダとロイの下に滑り込むように頭を下げた。洋次郎の伝家の宝刀、スライディング土下座である。妻と娘には白い目で見られている。

「本当に至らん息子で申し訳ない!!　こいつには責任もって育てますので、今後とも一つ、よろしくお願いします!!」

「おら、お前も頭を下げろ!!」と男鹿の顔面も床に叩きつけた。

「いえ、こちらこそ」

それに対し、目の前の悪魔のような女は憎たらしいほどに良い笑顔でそう言った。

「ヒルダとお呼びください」

数時間後。

ヒルダ達も同伴で夕食を済ませ、家族の対応に疲れながらもようやく男鹿は自分の部屋に逃げ込むことができた。

「てめぇらいい加減にしろよ。人の家族取り込みやがって・・・」

「仕方あるまい、貴様が坊ちゃまに選ばれてしまったのだから。あと夕飯うまかったぞ」

「くつろぎすぎなんだよ!!」

精神的に疲れ果てた様子の男鹿に対し、ヒルダはお茶をすすり悪げもなしに言った。

「だが、君も気になっているんじゃないか？　己の身に宿った力について」

それは、男鹿の椅子に勝手に座りながら同じくお茶をすすっているロイの言葉だった。

「あぁ？　こいつのことか？」

男鹿はそれを出した。
『自分自身を横にずらす』といった感じだった。言葉では説明しにくいそれを、男鹿は感覚的にやることができた。
全身緑の、不気味な実態。背中には蟲のような羽が生え、緑の学ランと、なぜかおしゃぶりを加えている。
「結局なんなんだよ、こいつは」
「言っただろう、それは君の『スタンド』だと」
「だーからスタンドってなんだって言ってんだろうが」
夕方のあの時から出してはいなかったが、男鹿はその存在が自身の体にあることを常に感じ取っていた。
「幽波紋（スタンド）。生命エネルギーが形になって現れた存在」
ベル坊を膝に抱え座るヒルダが、お茶を置きながら口を開いた。
「いわばそいつは、形をもった超能力みたいなものだ。物体を動かしたり、破壊することはもちろん、スタンドにはそれぞれ特殊な能力をもつ」
「例えば、私の『焔の錬金術師（サタン）』は指を鳴らすことにより焔を操ることができる」
そういうロイの手には、先ほどまでなかった手袋がはめられていた。甲に赤い魔方陣のような模様が刻まれた、白いグローブだ。
「スタンドとは本来、生まれついての発現する。それも極まれに生まれるものだ」
「スタンドはスタンド使いにしか見えない。そのため、スタンドの存在を知るのも極少数になる」
「・・・じゃあなんでオレがこんなもんだせんだよ。オレはこんな気持ち悪いもんみたことねえぞ」
その男鹿の言葉に、ヒルダはあきれたようにため息をついた。
「だから言っておるだろうたわけ。貴様は坊ちゃまに選ばれたのだと」
なんども聞いた台詞。この赤ん坊、アメストリスという国の王子。このふてぶてしい顔の王子に選ばれた、と。
「ベルゼバブ家は、昔から表に出ない脅威を相手にしてきた。それは

普通の人間だけではなく、存在自体表ざたにはできない化け物も含めてだ」
お茶を飲み干したロイは淡々と話をつづけた。
「それを可能にしたのが、ベルゼバブ家が代々受け継ぐ『力』」
曰く、それはかの昔に、ベルゼバブの祖先が脅威をたおすために身に着けた力が、代が変わるごとに変化していったものだという。
強大な力で、ベルゼバブ家はその力と、アメストリスの軍事力を持って脅威を排除してきたのだと。
そして、オール・フォー・ワンもかつて、その力によって封じられた脅威の一つだった。
「百年前。やつはベルゼバブ家の力によって打倒されたと考えられていた。だが生き延びており、数か月前に復活したのだ」
そして、オール・フォー・ワンは復活を知られる前に、自らの脅威となるベルゼバブ家を滅ぼそうとした。だが、直前で自体を察知したベルゼバブ三世が息子のベルゼバブ四世を逃した。ベルゼバブの血筋を絶たせぬために。オール・フォー・ワンを、今度こそ打倒すために。
「・・・だが、ベルゼバブ四世。坊ちゃまにはまだオール・フォー・ワンを倒すだけの力がそなわっていない」
そう言うヒルダの膝にいるベルゼバブ四世、ベル坊は、見ての通りの赤ん坊だ。巨悪を倒すための力も、育っていない。
「だが、坊ちゃまが育つのを待っていればオール・フォー・ワンはこの世界を支配してしまう」
「だから、そのためにベルゼ様の力を引き出すことができる者を探していたのだ」
ベル坊が、その力を託すのに足る人物。
ベル坊が信頼することができる人物。
それが、男鹿だったのだ。
「・・・いや、なんでオレなんだよ」
「ベルゼ様は強いものに惹かれるのだ」
もっともな質問をした男鹿だが、ロイから言われたその答えに、少

しいい気分になった。
「そしてベルゼ様はどうも性格がひねくれていてな。卑怯で残忍で人を人とも思わぬクソやろうだとなおいいようなのだ」
しかし付け足されたその項目に固まってしまう。
どれもこれも完全に当てはまっていた。
「巻き込んでしまって申し訳ないとは思っている」
改めって、ロイはまっすぐな目で男鹿の顔を見ていた。うちに秘めた誠実さがわかる、綺麗な目だ。
「だが、こちらも手段を選んではいられないのだ。力を貸してほしい」
その真摯な言葉を聞いた男鹿は、
「ぜってーやだ」
思いっきり顔をゆがめて即答した。
「なにが脅威だ。オレはそんなめんどくせーこと絶対やらねえからな」
取りつく島もないとはこのことだろう。あんな話を聞いておいてなんの躊躇もなくここまで言える者もなかなかいないのではないだろうか。
だが、ロイ達は特に困惑も動揺もしなかった。
「だが、オール・フォー・ワンの刺客は近いうちにやってくるだろう。それがなくとも、君はいずれ戦うことになる」
脅しだとかそういったものではなく、ただそういった事実をつげるように、ロイは言った。
「なぜなら、スタンド使いは引かれあうものだからだ。まるで、そう決まっているかのように」
「ちょっと待て。てめえあの金髪ゴスロリ巨乳と一つ屋根の下で寝たのか？」
「・・・そこかよ」
国がどうたらという話を聞いた後の感想ではなかった。だが思春期盛りの男・古市にとっては重要事項だったらしく、ロイというおっさんもいたのに「ふざけんなオレが半壊した家でしょっぱい思いしてる時にてめえだけいい思いしやがって」とわめいていた。

「・・・しかし、お前思ってたよりもやばいことになってんな」
改めて、ことの深刻さを思いしった古市。
「まったくしょうがねえやつらだぜ。人の迷惑をまるで考えてねえ」
「お前もな」
いま、二人は校舎の外を歩いていた。少し行った先に、アイスの自動販売機があるのだ。
昼も過ぎて思いっきり授業中なのだが、校舎の外には普通に生徒がはびこっていた。
「で、なんでお前その子連れてきてんだよ」
「いやな。こいつ少しでも離れると泣きだすんだよ」
泣く、という言葉で、古市は一昨日のことを思い出していた。
あの、地獄のような惨事。雷の渦を。
「・・・まじかよ」
「ああ、十五メートル以上離れると死ぬらしい」
さらっと言うような言葉ではなかった。なによりも恐ろしいのが、それが冗談だと断定できないことだった。
そんな物騒な話をしながら、自動販売機のある場所へ続く階段を上っていた、そんな時だった。
男鹿の肌が、なにかを感じ取った。
突き刺すような、鋭い感覚。
喧嘩慣れしている男鹿にとっては慣れた、だが、これまで感じたこともないほどの、殺気だった。
瞬間、男鹿の体が吹き飛んだ。脇腹をえぐるようにして、なにかが男鹿を吹き飛ばしたのだ。
「男鹿っ!?」
階段のかなり上のほうから転落したが、なんとか持ち前の反射神経と身体能力で受け身をとり、すぐさま辺りを見渡した。だが、辺りに人の気はなく、男鹿に当たったと思われる道具もなかった。
ふと気が付いたのは、脇腹、なにかを食らったあたりが、濡れていることだった。
「どうした男鹿。いきなり転げ落ちて」

慌てて駆け寄ってきた古市を睨めつける男鹿。
「古市・・・てめえの仕業か」
「は、え、なにが!? お前が一人で吹っ飛んだんだよ!」
そうやって言い合っていると、痛みも消えていった。
もう一度周りを見たが、やはり何者もいなかったため訝し気に思いながらも、男鹿は古市をつれてその場を去った。
「にゃー。アレが、男鹿辰巳、か」
それを陰で見つめる男がいたことに、男鹿はやはり気が付かなかった。

背中刺す嫉妬

自動販売機は、階段を上った先にある体育館の側にあった。不良率一二〇パーセントの石矢魔高校に部活なんてものはほとんどないも同然だが、一部の物好きが勝手にやっていることもある。いまはバスケ部と思しき男たちが近くにあった水道で水を飲んでいたが、男鹿に気が付くと怯えるように去っていった。

古市は自販機でお気に入りのアイスを押した。コーンアイスで他ではあまり見ないヨーグルト味のアイスだ。一四〇円と値は張るが、それに見あった一品である。落ちてきたアイスを手に取った古市はさっさと開封し、口にいれた。夏の暑さもあって、格別の味だった。

男鹿も自分のアイスを買った。いつの間にか起きていたベル坊が、男鹿の肩からアイスを溶けそうなほど熱い目で見ていた。「くうか？」と男鹿がアイスを近づけると、ベル坊は器用におしゃぶりを自分で外し、アイスにかぶりついた。美味しそうにしていたが、少し経つと「ダ～」と頭を押さえだした。

「なにやってんだお前ら・・・」

そんな様子を見ていた古市は、ふと水の音に気が付いた。

振り返ると、水道の蛇口から水が出っぱなしになっていた。

先ほどのバスケ部が閉め忘れたのかと思い、古市は水道に近づき、ドバドバ出ている蛇口をしっかりと絞め、水を止める。

そして時に気にも留めず、男鹿の下へ戻ろうとする古市の耳に、その音が入る。

水が、はじく音だ。

振り返ると、蛇口から、水が出ていた。ドバドバと、際限なく。

「な、」

その瞬間だった。

水の弾丸が、古市を襲った。

とっさにかざした手をはじき、その弾丸は古市をかすめる。

「なんだ!?」

蛇口の水に襲われた、という事実に古市の認識が追い付いく。

古市の慌てる声に、男鹿も気が付いたようだ。
「どうした、古市」
「み、水が。蛇口の水が」
古市が言い切る前に、次の動きがあった。
いまだ出続ける水が、二匹の蛇のようにうねりながら宙を舞う。
その幻想的ながら超常的な現象に目を奪われていた古市を、その水が襲う
とっさに体を動かす古市だったが、よけきれたのは片方だけだった。よけた先に、もう片方の水の弾丸が迫る。
すると、古市の視界が、いきなり下へと落ちた。
とっさに、男鹿が古市の足を払ったのだ。
古市の頭が地面に落ちると同時に、その上を水の弾丸が通り過ぎる。
「いってぇなにすんだ!!」
頭に響く痛みに思わず声をあげる古市。
しかし、その声に男鹿が答える間もなく、強烈な音の連鎖が起こる。
水道にあった他の蛇口からも、水が噴き出したのだ。
それも、異常な量が。
「おいおい、なんだこりゃあ」
その異常な光景に、男鹿でさえも茫然としていた。
古市もそれを茫然と見ていると、ふと、地面についていた手に、冷たい感触がした。
水が、這い上がっていた。肌の上を、蛇のように。
見れば、水道の下、水道管から水が漏れ出て、地面が水浸しになっていたのだ。
「うおわっ!?」
「古市ッ!?」
とっさに振り払おうとするも、その水は古市の身体にまとわりつき、上へ上へと這い上がっていく。
もがけどもがけど振り落ちない水は、次第に顔へと集まり、古市の呼吸を奪っていく。

取り払おうと手をかけるが、水をつかめるはずもなく、古市に絶望感が増す。
「どうだ？　男鹿辰巳」
その声は、男鹿の後ろからふとかけられた。
男鹿がふりむけば、そこには金髪の少年が立っていた。
身長は一八〇センチメートルほどあるだろうか。グラサンをかけ、学ランの下にアロハシャツまで着た軽薄そうな男が、自販機に寄りかかって立っていた。
「誰だてめー」
「土御門元春。その赤ん坊を、貰いにきた」
土御門と名乗ったその男は不敵な笑みを浮かべ、ソーダのジュース缶を手で弄んでいた。
この超常的な状況に、赤ん坊。
男鹿の脳裏に、先日にロイから聞いた話が思い起こされる。
「スタンド……」
「そう、オレのスタンド『背中刺す嫉妬（リヴァイアサン）』が操る水は、捕らえることのできない拘束だ」
スタンド。
ロイ曰く、超能力の具現化。
そして彼は言っていた。
いずれ、Ａ（オール）Ｆ（フォー）Ｏ（ワン）の刺客が襲いにくると。
「状況は簡単だ。その赤ん坊をこっちによこせば、オレはお前たちには手をださない。そいつも解放する」
缶ジュースを飲みながら、淡々と話す土御門。
「早くしろ。親友が死ぬ様を、見たくはないだろ」
その間にも、もがき苦しむ古市のくぐもったうめき声が男鹿の耳に入っていた。
男鹿は、その話を黙って聞いていた。
そして、動きだす。
男鹿の背後に、それは現れ立つ。
全身緑の、異様な存在。

男鹿のスタンド、『蠅の王(ベルゼブブ)』。
しかし、鉄塔を吹っ飛ばすパワーが向かう先は、敵の土御門ではない。
『アダァ!!』
奇妙な雄叫びと共に『蠅の王(ベルゼブブ)』が殴りつけたのは、もがき苦しむ古市の顔面だった。
超パワーによって殴られた古市の身体は遠くに吹き飛び、それと共に水から引きはがされる。
土御門の缶ジュースを飲む手が止まる。
「これで、こいつを渡す必要もなくなったな」
遠くの芝生に顔を突っ込ませる古市をよそに、土御門を睨めつける男鹿。
土御門の顔が、変わるのが分かった。
蛇口の水が、土御門の足元で水たまりを作っていた。
そしてその水面に、青色の竜のような蛇が現れる。
「後悔することになるぞ。赤ん坊を渡さなかったことを」
その言葉と共に、その蛇、『背中刺す嫉妬(リヴァイアサン)』の口が開く。
鋭くとがった牙の中心で、水が渦巻いているのが見えた瞬間、その口から水の砲弾が撃ち出される。それも一発ではなく、一度に複数もの砲弾が、広範囲に撃ちだされた。
しかし、男鹿はそれを持ち前の動体視力と身体能力でたやすく躱し続ける。
攻撃がかすりもしない土御門だったが、その顔にはなぜか笑みがあった。
そして、全て躱し終えた後、男鹿は気が付いた。
男鹿の足元に、巨大な水たまりができていたことに。
もともと、蛇口の水は未だに止まっていなかったのだ。それに加え『背中刺す嫉妬(リヴァイアサン)』による水の砲弾により、意識をそらされると共に水の増量も同時にやってのけた。
「終わりだ。溺死しろ!」
男鹿の身体を、水が這いあがっていく。男鹿の怪力でもがけど、水

が離れる気配はない。古市と同じように、水は身体を這い、顔へと集まろうとする。男鹿の息の根を止めるために。
「なあ、てめえのスタンド。水を操るんだってな」
そんな状況だというのに、男鹿は特に焦ることもなくそういった。
その顔に、恐怖は微塵も感じられなかった。
土御門はその様子を訝し気におもうも、攻撃の手を止めようとはしない。
「つーことはよ。オレのスタンドにもなんかあるってことだよな。能力的なやつが」
「……なにを言うかと思えば」
そのセリフに、土御門は肩透かしを食らったようだ。
「さっき、お前の親友を吹っ飛ばした超パワー。あれこそ、お前のスタンドの能力だ」
スタンドをよく知る土御門にとっても、あのパワーは普通ではなかった。それはつまり、そのパワーそのものがスタンド能力だということを現わしていると、土御門は考えたのだ。
それに、「へっ」と男鹿は嘲笑で返す。
「残念、ハズレだ」
次の瞬間、『蠅の王（ベルゼブブ）』が雄叫びと共に、男鹿の足元の水自体を殴りつける。
それと共に、『蠅の王（ベルゼブブ）』の拳から、光が瞬く。
迸る発光。すなわち、稲妻が。
「な、」
そしてそれは、同じく足元に水たまりを作っていた土御門の下まで流れる。
水たまりから体を出していた『背中刺す嫉妬（リヴァイアサン）』もろとも、『蠅の王（ベルゼブブ）』の電撃が土御門を襲う。
一瞬の攻撃だったが、強力な電撃に、土御門は怯み、思わず、能力を解いてしまう。
その隙を、男鹿は見逃さない。
すかさず駆け抜け、土御門との距離をつめる。

土御門は慌てて水を操り、男鹿を捕らえようとするが、その全てをよけきる。
そして、『蠅の王(ベルゼブブ)』のその腕が、『背中刺す嫉妬(リヴァイアサン)』の首根っこを掴む。
「ベル坊」
逃れようともがく土御門だが、強力すぎる握力の前に、苦しむことしかできないでいた。
「ムカつく野郎に喧嘩売られたときにどうすればいいか、わかるか？」
それに対し、不敵に、無敵に、悪魔の笑みを浮かべ、男鹿は言う。
ベル坊はそれに、「ダッ！」と力強くうなずく。
「『百倍』返しだ!!」
『ダダダダダダーブーッ!!!!』
『蠅の王』の電撃を纏った剛腕が、雄叫びと共に『背中刺す嫉妬(リヴァイアサン)』の身体を滅多打ちにする。幾千もの拳が撃ち込まれ、それと同時に、スタンドにリンクした土御門の身体も全身を打ち砕かれ、血しぶきが舞う。
そして最後には、『蠅の王(ベルゼブブ)』の拳から放たれた雷の砲撃が、『背中刺す嫉妬(リヴァイアサン)』と土御門を襲った。
鉄塔をも吹き飛ばすパワーをまともに食らい、黒焦げになった土御門は血反吐を吐き倒れ伏せた。
「ったく、ここ最近はわけのわからんことばっかおきやがる」
頭を掻きむしりながら、そうつぶやく男鹿。
「てめえにはいろいろ聞かせてもらうぞ」
そう言い、男鹿は気絶した土御門を背負い、ついでに古市を叩き起こしその場を去るのだった。